

半島一奇抄

泉鏡花

青空文庫

「やあ、しばらく。」

記者が掛けた声に、思わず力が入って、運転手がはたと自動車を留めた。……実は相あいの乗りして席を並べた、修善寺の旅館の主人の談話を、ふと遮った調子はずんで高かったためである。

「いや、構わず……どうぞ。」

振向いた運転手に、記者がちよつとてれながら云ったので、自動車はそのまま一ひと軌きりして進んだ。

沼津に向つて、浦々の春遅き景色を馳はしらせる、……土地の人は（みつと）と云う三津みつとの浦を、いま浪打際とほとんどすれすれに通る処ところであつた。しかし、これは廻みちり路である。

小暇を得て、修善寺に遊んだ、一——新聞記者は、暮春の雨に、三日ばかり降込められた、宿の出入りも番傘で、ただ垂籠たれこめがちだつた本意ほんいなさに、日限ひぎりの帰路を、折から快晴した浦づたい。——「当修善寺から、口野浜くちのはま、多比たひの浦、江の浦、獅子浜ししはま、馬込崎と、駿河湾するがわんを千本の松原へ向つて、富士御遊覧で、それが自動車と来た日には、どんな、大金持ちだつて、……何、あなた、それまでの贅ぜい沢たくでございますよ。」と番頭ばんとうの膝ひざを敲たたい

たのには、少分の茶代を出したばかりの記者は、少からず怯かされた。が、乗りかかった船で、一台大に驕った。——主人が沼津の町へ私用がある。——そこで同車で乗出した。

大仁の町を過ぎて、三福、田京、守木、宗光寺、南条——といえは北条の話が出た。……四日町を抜けて、それから小四郎の江間、長塚を横ぎって、口野、すなわち海岸へ出るのが順路であった。……

うの花にはまだ早い、山田小田の紫雲英、残の菜の花、並木の随処に相触れては、狩野川が縋子を張つて青く流れた。雲雀は石山に高く囀つて、鼓草の綿がタイヤの煽に散つた。四日町は、新しい感じがする。両側をきれいな細流が走つて、背戸、籬の日向に、若木の藤が、結綿の切をうつむけたように優しく咲き、屋根に蔭つくる樹の下に、山吹が浅く水に笑う……家ごとに申合せたようである。

記者がうっかり見惚れた時、主人が片膝を引いて、前へ屈んで、「辰さん——道普請がある筈だが前途は大丈夫だろうかね。」「さあ。」「さあじゃないよ、それだと自動車は通らないぜ。」「もつとも半月の上になりますから。」「と運転手は一筋路を山の根へ見越して、やや反つた。「半月の上だつて落着いている処じゃないぜ。……いや、もうちと後路で気をつけようと、修善寺を出る時から思つていながら、お客様と話で夢中だった。——

「何、海岸まわりは出来ないのですかね。」「いいえ、南条まで戻って、三津へ出れば仔細しさいありませんがな、気の着かないことをした。……辰さん、一度聞いた方がいいぜ。」

「は、そういたしましたよう。」「恐ろしく丁寧になったなあ。」と主人は、目鼻をくしゃくしゃとさせて苦笑して、茶の中折帽なかおれぼうを被り直した。「はやい方が可い、聞くのに——」

けれども山吹と藤のほか、村路むらみちの午静ひるずかに、渠等かれらを差覗さしのぞく鳥の影もなかった。そのかわり、町の出はずれを国道へついて左へ折曲ろうとする角家の小店こみせの前に、雑貨らしい箱車を置いて休んでいた、半纏着はんでんぎの若い男は、軒の藤を潜りながら、向うから声を掛けた。

「どこへ行くだ、辰さん。……長塚の工事は城を築くような騒ぎだぞ。」「まだ通れないのか、そうかなあ。」店の女房も立つて出た。「来月半ばまで掛るんだとよう。」「いや、難ありがと有う。さあ引返した。……いやしくも温泉場において、お客を預る自動車屋ともあるものが、道路の交通、是非善悪を知らんというのは、まことにもって不心得。」……と、少々芝居がかりになる時、記者は、その店で煙草たばこを買った。

砂を挙げて南条に引返し、狩野川を横切った。古奈こな、長岡——長岡を出た山路には、遅お桜そでざくらの牡丹咲ぼたんざきが薄紫に咲いていた。長瀬を通って、三津の浜へ出たのである。

富士が浮いた。……よく、言う事で——佐渡ヶ島には、ぐるりと周囲に欄干まわりがあるか、

と聞いて、……その島人に叱られた話がある。が、巖山の巉崖を切つて通した、榮螺の角に似たぎざぎざの麓の径と、浪打際との間に、築繞らした石の柵は、土手というよりもただ低い欄干に過ぎない。

「お宅の庭の流にかかった、橋廊下の欄干より低いくらいで、……すぐ、富士山の裾を引いた波なんですな。よく風で打つけませんね。」

「大丈夫でございますよ。後方が長浜、あれが弁天島。——自動車は後眺望がよく利きませんな、むこうに山が一ツ浮いていきましょう。淡島です。あの島々と、上の鷲頭山に包まれて、この海岸は、これから先、小海、重寺、口野などとなりますと、御覧の通り不穏な駿河湾が、山の根を奥へ奥へと深く入込んでおりますから、風波の恐怖といつてはほとんどありません——そのかわり、山の麓の隅の隅が、山扁の岬といった僻地で……以前は、里からではようやく木樵が通いますくらい、まるで人跡絶えたといった交通の不便な処でございましてな、地図をちよつと御覧なすつても分りませんが、絶所、悪路の記号という、あのパチパチとした線香花火が、つい頭の上の山々を飛び廻っているのですから。……手前、幼少の頃など、学校を怠けて、船で淡島へ渡つて、鳥居前、あの頂辺で弁当を食べるなどはお茶の子だったものですが、さて、この三津、重寺、口野一帯と来ますと、

行軍の扮装いでたちでもむずかしい冒険だとしたものでしてな。——沖からこの辺の浦を一目に眺めますと、弁天島に尾を曳ひいて、二里三里に余る大竜が一条ひとすじ、白浪の鱗うろこ、青い巖いわの膚はだを横よこたえたように見える、驚頭山かむりを冠かむりにして、多比の、就なかなずく中いりくぼ入窪いりくぼんだあたりは、腕を張つて竜が、爪に珠を掴つかんだ形だと言います。まったく見えませんのでな。」

「乗つてゐるんですね！ その上にいま……何だか足が擦くすくすつたいようですね。」

記者はシイツに座をずらした。

「いえ、決して、その驚かし申すものではありません。それですから、弁天島の端なり、その……淡島の峯から、こうこの巖山ながを視ながめますと、本で見ました、仙境、魔界といった工ぐ合あいで……どんなか、拍子で、この崖がけに袖そでの長い女でも居ようものなら、竜宮から買ものあ頭あわられたかと思つたもので。——前途さきの獅子浜、江の浦までは、大分前に通じましたが、口野からこちら……」

自動車は、既に海に張出した石の欄干を、幾いくところ処ところか、折曲り折曲りして通つていた。

「三津を長岡へ通じましたのは、ほんの近年のことで、それでも十二三年になりましたよ。か。——可笑おかしな話わがございますよ。」

主人は、パツパツと二つばかり、巻まきたばこ 苘まを深く吸つて、

「……この石の棧道が、はじめて掛かかりました。……まず、開通式といった日に、この村長——唯ただいま今でも存命で居ります——年を取ったのが、大勢と、村口に客の歓迎に出ておりました。県知事の一行が、真まっさき先に乗込んで見えた……あなた、その馬車——」

自動車の警笛に、繰返して、

「馬車ばしやが、真正面に、この棧道一杯おおいになって大きく目に入つたと思召せ。村長の爺じいさま様が、突然ななやっつ七八歳こどもの小児こどものような奇声を上げて、（やあれ、見やれ、鼠ねずみが車を曳ひいて来た。）——とお話さ、話のようでございましたな。」

「やあ、しばらく！」

記者が、思わず声を掛けたのはこの時であつた——

肩も胸も寄せながら、

「浪打なみう際の山の麓ふもとを、向うから寄る馬車を見て——鼠ねずみが車を曳いて来た——成程、しかし、それは事実ですか。」

記者が何ゆえか意気込んだのを、主人は事もなげに軽く受けた。

「ははは、一つばなし。……ですが事実にも何にも——手前も隣郡のお附合、……これで徽章きしょうなどを付けて立会いました。爺様の慌てたのを、現にそこに居て、存じておりますが、別に不思議はありません。申したほどの嶮けんどう道で、駕籠かごは無理にもどうでしょうかな——その時七十に近い村長が、生れてから、いまだかつて馬というものの村へ入ったのを見たことがなかったのでございますよ。」

「馬を見て鼠……何だか故事がありそうで変ですが——はあ、そうすると、同時に、鼠が馬に見えないとも限りませんかしら。」

「は？」

「鼠が馬に見えるかも知れませんが、どうでしょう。」

「いや、おっしゃると。」

主人は少し傾いたが、

「ただ、それだけの話で、……深く考えた事ありませんが、成程、ちよつと似ているかも知れませんが、もつとも黒い奴ですがな。」

「御主人——差当りだけでも、そう肯定をなさるんなら、私が是非話したい事があるので。現在、しかもこの土地で、私が実見した事実ですがね。余り突拍子がないようですか

ら——実はまだ、誰にも饒舌しやべりません。——近い処が以前からお宅をひいきの里見、中戸川さん、近頃では芥川さん。絵の方だと横山、安田氏などですか。私も知合ではありませんが、たとえば、その人たちにも話をしません。芥川さんなどは、話上手で、聞上手で、痩やせていても懐ふところ中が広いから、嬉しそうに聞いてはくれるでしょうが、苦にがわらい笑ものだろうと思うから、それにさえ遠慮をしているんですがね。——御主人。」

「ははあ、はあ……で、それは。」

「いや、そんなに大した事ではありません。実は昨年、ちょうど今頃……もう七八日あどでした。……やっぱりお宅でお世話になって、その帰途かえりがけ、大仁からの電車でしたよ。この月二十日の修善寺の、あの大師講の時ですがね、——お宅の傍そばの虎溪橋こけいばし正面の寺の石段の真中まんなかへ——夥おびただし多い参詣さんけいだから、上うえ下したの仕切しきりがつきましよう。」

「いかにも。」

「あれを青竹一本で渡したんですが、丈といい、その見事さ、かこみの太さといつちやあない。——俗に、豆まめ狸たぬきは竹の子の根に籠こもるの、くだ狐ぎつねは竹筒の中で持運ぶのと言うんですが、燈心で釣をするような、嘘うそばっかり。出でも、入はいりも出来るものか、と思っていましたけれども、あの太さなら、犬の子はすぼんと納まる。……修善寺は竹が名物だろうか、

そういえば、随分立派なのがすすくある。路ばたでも竹の子のずらりと明るく行列をした処を見掛けるが、ふんだんらしい、誰も折りそうな様子も見えない。若竹や——何とか云う句で宗匠を驚したと按摩にまで聞かされた——確に竹の楽土だと思ひました。ですがね、これはお宅の風呂番が説破しました。何、竹にして売る方がお銭になるから、竹の子は掘らないのだと……少く幻滅を感じましたが。」

主人は苦笑した。

「しかし——修善寺で使った、あのくらいなのは、まったく見た事はない、と田京あたりだったでしょう。温泉で、見知越で、乗合わした男と——いや、その男も実は、はじめ見たなどと話していると、向う側に、革の手鞆と、書もつらしい、袱紗包を上置いて、腰を掛けていた、土耳古形の毛帽子を被った、棗色の面長で、髯の白い、黒の紋織の被布で、人からのいい、茶か花の宗匠といった風の……」

半ば聞いて頷いた。ここで主人の云つたのは、それは浮島禪師、また桃園居士などと呼ばれる、三島沼津を掛けた高持の隠居で。……何不足のない身の上とて、諸芸に携わり、風雅を楽む、就中、好んで心学一派のごとき通俗なる仏教を講じて、遍く近国を教導する知識だそうである。が、内々で、浮島をかなで読むお爺さん——浮島爺さんという

渾名あだなのあることも、また主人が附加つえた。

「その居士こじが、いや、もし……と、莞爾にこにこ々々と声を掛けて、……あれは珍らしい、その訳じゃ、茅野ちのと申して、ここから宇佐美の方へ三里も山奥の谷間たにあいの村が竹の名所でありましてな、その講中が大自慢で、毎年々々、南無なむだいしへんじようこんごう大師遍照金剛でかつぎ出して寄進しますのじゃ……と話してくれました。……それから近づきになって、やがて、富士の白雪あさ日でとけて、とけて流れて三島へ落ちて、……ということに、なつたので。」

自動車自動車が警笛警笛を。

主人は眉の根に、わざと深く皺しわを寄せて、鼻で撓ためるように顔を向けた。

「はてね。」

「いや、とけておちたには違いはありませんがね——三島女郎衆じよろしゆの化粧の水などという、はじめから、そんな腥なまぐさい話の出よう筈はありません。さきの御仁体でも知れます。もうずつと精進で。……さて、あれほどの竹の、竹の子はどんなだろう。食べたら古今の珍味だろう、というような話から、修善寺の奥の院の山の独活うど、これは字も似たり、独鈷とっこうどと称とえて形も似ている、仙家の美膳びぜん、秋はまた自然薯じねんじよ、いずれも今時の若がいり法などは大俗で及びも着かぬ。早い話が牡丹ぼたんの花片はなびらのひたしもの、芍薬しやくやくの酢味噌すみそあえ。——

はあはあと、私が感に入つて驚くのを、おかしがつて、何、牡丹のひたしものといった処で、一輪ずつ枝を折る殺風景には及ばない、いけ花の散つたのを集めても結構よろしい。

しかし、贅沢といえ、まことに蘭飯らんぱんと称して、蘭の花をたき込んだ飯がある、禪家の鳳髓ほうずい、これは、不老の薬と申しても可い。——御主人——これなら無事でしょう。まずこの辺までは芥川さんに話しても、白い頬を窪まし、口許くちもとに手を当てるうなずうがね、……あとが少しむずかしい。——

私はその時は、はじめから、もと三島へ下りて、一汽車だけ、いつも電車ではかり見て通る、あの、何とも言えない路傍みちばたの綺麗な流ながれを、もつとずつと奥まで見たいと思つていましたから。」

「すなわち、化粧の水ですな。」

「お待ちなさい。そんな流ながれの末じやあ決してない。朝日でとけた白雪を、そのまま見たかつたのに相違ないのです。三島で下りると言う、居士が一所に参つて、三島の水案内をしようと言います。辞退をしましたが、いや、是非ひとつ、で、私は恐縮をしたんですがね。実は余り恐縮をしなくても可よさそうでしたよ。御隠居様、御機嫌よう、と乗合わせた近まわりの人らしいのが、お婆さんも、娘も、どこかの商人らしいのも、三人まで、小さ

な荷ですが一つ一つ手伝いましてね、なかなかどうして礼拝されます。が、この人たちの前、ちと三島で下りるのが擦くすくつたかつたらしい。いかこついで、私は風流の道づれにされた次第だ。停車場前の茶店も馴染なじみと見えて、そこで、私のも一所に荷を預けて、それから出掛けたんですが——これがズツとそれ、昔の東海道、箱根のお関所を成りたけ早めに越して、白うすころばしから向う阪をさがりに、見ると、河原前の橋を掛けてこの三島の両側に、ちらちら灯が見えようというのでと——どこか、壁張りの古い絵ほどに倅おもかげの見える、真昼で、ひっそりした町を指さされたあたりから、両側の家の、こう冷い湿しめつぽい裡なかから、暗い白粉おしろいだの、赤い油だのが、何となく匂におって来ると——昔を偲しのぶ、——いや、宿しゆくのなごりとは申す条、通り筋に、あらわな売色のかかる体裁は、大に風俗を害おおいしますわい、と言いう。その右斜みぎななめな二階の廊下に、欄干に白い手を掛けて立っていた、媚なまめかしい女があります。切組の板で半身です、が、少し伸上るようにしたから、帯腰がすらりと見える。：みずあさぎの水浅葱の手絡てがらで円鬘まるまげに艶つやつや々と結むすつたのが、こう、三島の宿を通りかかる私たちの上のぞから覗くように少し乗出したと思うと、——えへん！……居士が大な咳せきをしました。女がひよいと顔をそらして廂ひさしへうつむくと、猫が隣りから屋根づたいに、伝うのです。どうも割合に暑うござすと、居士は土耳其帽トルコぼうを取とつて、きちんと畳たたんだ手拭てぬぐいで、汗を拭ふきました

たつけ。……」

主人も何となく中折帽なかおれぼうの工合ぐあいを直して、そしてクスクスと笑った。

「御主人の前で、何も地理を説く要はない。——御修繕中でありました。神社へ参詣をして、裏門の森を抜けて、一度ちよつと田畝道たんぼみちを抜けましたかね、穀蔵こくぐら、もの置蔵などの並んだ処を通つて、昔の屋敷町といったのへ入つて、それから榎えのきの宮八幡宮——この境内が、ほとんど水源と申して宜よろしい、白雪のとけて湧わく処、と居士が言います。……榎えのきは榎えのき、大楠おおくす、老櫟ふるかし、森しんしん々と暗く聳そびえて、瑠璃るり、瑪瑙めのうの盤ばん、また薬研やげんが幾つも並んだように、蟠わだかまつた樹の根の脈々、巖いわの底、青い小石一つの、その下からも、むくむくとも噴出さず、ちろちろちろちろと銀の鈴の舞うように湧わいでいます。不躰ぶしつけですが、御手洗みたらしで清めた指で触つて見ました。冷い事、氷のようです。湧わいて響くのが一粒ずつ、掌てのひらに玉を拾うそうに思われましたよ。

あとへ引返して、すぐ宮前とおりの通から、小橋を一つ、そこも水が走っている、門ばかり、家は形もない——潜門くぐりもんを押して入ると——植木屋らしいのが三四人、土をほつて、運んでいました。」

——別荘の売りものを、料理屋が建直すのだったそうである。

「築山のあとでしょう。葉ばかりの菖蒲は、根を崩され、霧島が、ちらちらと鍬の下に見えます。おお御隠居様、大旦那、と植木屋は一斉に礼をする。ちよつと邪魔をしますよ。で、折れかかった板橋を跨いで、さつと銀をよないだ一幅の流の汀へ出ました。川というより色紙形の湖です。一等、水の綺麗な場所だな。居士が言いましたよ。耕地が一面に向うへ展けて、正面に乙女峠が見渡される……この荒庭のすぐ水の上が、いま詣でた榎の宮裏で、暗いほどな茂りです。水はその陰から透通る霞のように流れて、幅十間ばかり、水筋を軽くすらすらと引いて行きます。この水面に、もし、ふつくりとした浪が二ツ処立つたら、それがすぐに美人の乳房に見えましょう。宮の森を黒髪にして、ちよつど水脈の血に揺らぐのが真白な胸に当るんですね、裳は裾野をかけて、うつくしく雪に捌けましよう。——

椿が一輪、冷くて、燃えるようなのが、すつと浮いて来ると、……浮藻——藻がまた綺麗なのです。二丈三丈、萌黄色に長く靡いて、房々と重つて、その茂つたのが底まで澄んで、透通つて、軟な細い葉に、ぱらぱらと露を丸く吸つたのが水の中に映るのですが——浮いて通るその緋色の山椿が……藻のそよぐのに引寄せられて、水の上を、少し斜に流れて来て、藻の上へすつと留まつて、熟となる。……浅瀬もこの時は、淵のように寂然と

する。また一つ流れて来ます。今度は前の椿が、ちよつと傾いて招くように見えて、それが寄るのを、いま居た藻の上に留めて、先のは漾ただよつて、別れて行く。

また一輪浮いて来ます。——何だか、天の川を誘い合つて、天女の簪かんざしが泳ぐようで、私は恍惚うつつり、いや茫然ぼうぜんとしたのですよ。これは風情じや……と居士も、巾きんちやく着じめの煙草入の口を解いて、葡萄ぶどうに栗鼠りすを高彫たかぼりした銀煙管ぎんせうで、悠暢ゆうちようとしてうまそうに喫のんでいました。

目の前へ——水が、向う岸から両岐ふたつに尖とがつて切れて、一幅裾ひとはば拵そひろがりに、風に半幅はんぷくを絞しぼつた形に、薄い水脚すいせきが立つた、と思うと、真黒まっくろな面つらがぬいと出ました。あ、この幽艶ゆうえん清雅な境へ、凄まじい闖入者ちんにゆうしや！と見ると、ぬめりとした長い面が、およそ一尺ばかり、左右へ、いぶりを振つて、ひゅつひゅつと水を捌さばいて、真横まごほに私たちの方へ切つて来る。鱒どじょうか、鯉こいか、鮒ふなか、鯰なますか、とと思うのが、二人とも立つて不意に顔を見合わせた目に、歴々ありありと映ると思う、その隙もなかつた。

——馬じや……

と居士が、太く怯おびえた声で喚わめいた。私もぎよつとして後あとへ退さがつた。

いや、嘘うそのような話です——遙はるかに蘆あしの湖こを泳ぐ馬が、ここへ映つたと思つたとしてもよ

し、軍書、合戦記の昔をそのまま幻に視たとしても、どっち道夢見たように、瞬間、馬だと思つたのは事実です。

やあい、そこへ遁げたい……泳いでらい、畜生々々。わんぱくが、四五人ばらばらと、畠の縁へ両方から、向う岸へ立ちました。

——鼠じや……鼠じや、畜生めが——

と居士がはじめて言つたのです。ばしやんばしやん、氷柱のように水が刎ねる、小児たちは続けさまに石を打つた。この騒ぎに、植木屋も三人ばかり、ずツと来て、泳ぐ、泳ぐ、泳ぐ、泳ぐ……と感に堪えて見ている。

見事なものです。實際巧に泳ぐ。が、およそ中流の処を乗切れない。向つて前へ礫が落ちると、すつと引く。横へ飛ぶと、かわして避ける。避けつつ渡るのですから間がありました。はじめは首だけ浮いたのですが、礫を避けるはずみに飛んで浮くのが見えた時は可お恐そいろ 兀はげ斑まだらの大鼠で。畜生め、若い時は、一手、手裏剣も心得たぞ——とニヤニヤと笑いながら、居士が石を取つて狙つたんです。小児の手からは、やや着弾距離を脱して、八方こつちへ近づいた処を、居士が三度続けて打つた。二度とも沈んで、鼠の形が水面から見えなくなつては、二度とも、むくむくと浮いて出て、澄ましてまた水を切りましたが

ね、あたたつた！　と思う三度の時には、もう沈んだきり、それきりまるで見えなくなる。
 ……

水は清く流れました、が、風が少し出ましてね、何となくぎつと鳴ると、……まさか、そこへ——水を潜くぐつて遁げたのではありませんまいが、宮裏の森の下の真暗まつくらな中に落おち重なった山椿の花が、ざわざわと動いて、あとからあとから、乱れて、散つて、浮いて来る。……大木の椿も、森の中に、いま燃ゆるように影を分けて、その友だちを覗のぞいたようです。——これはまた見ものになった——見るうちに、列を織つて、幾つともなく椿の花が流れて行く。……一町ばかり下しもに、そこに第一の水みず車ぐるまが見えます。四五間さきに水車、また第三の水車、第四、第五と続いたのが見えます。流ながれの折曲る処ところに、第六のが半輪の月形に覗いていました。——見る内に、その第一の水車の歯へ、一輪紅椿が引掛ひっかつた——続いて三ツ四ツ、くるりと廻るうちに七ツ十ウ……たちまちくると緋色かさなに累ると、直ぐ次の、また次の車へもおなじように引ひ掛かつて、廻りながら累るのが、流れる水脚のままなんですから、早いも遅いも考える間はありません。揃あつて真紅な雪が降積あるかと思つて、それが一つ一つ、舞いながら、ちらちらと水晶を溶いた水に揺れます。呆気あけに取られて、ああ、綺麗だ、綺麗だ、と思つうちに、水玉を投くげて、紅べにの※を揚あげると、どう

でしょう、引いている川添の家やごとの軒より高く、ときかの燃えるように、水柱を、颯さつと揃そろって挙げました。

居士が、けたたましく二つ三つ足踏あしづみをして、胸を揺ゆつて、（火事じゃ、……宿しゆくじゃ、おたにの方じゃ——御免。）とひよこひよここと日和下駄ひよりげたで駆出しざまに、門を飛び出ようとして、振返へんぱんつて、（やあ、皆も来てくれ。）尋常たんだごとではありません。植木屋徒であいも誘いわれて、残らずどやどや駆けて出る。私はとぼんとして、一人、離島はなれじまに残された気がしたんです。こんな島には、あの怪あやしい大鼠も棲すもうと思う、何となく、気を打うつて、みまわしますとね。」

「はあ——」

「ものの三間とは離れません。宮裏みやうらに、この地境じぎかいらしい、水が窪み入よどった淀みに、朽ちた欄干ぐるみ、池の橋の一部が落込んで、流ながれとすれすれに見えて、上へ落椿たまたが溜たまりました。うつろに、もの寂しくただ一人で、いまそれを見た時に、花がむくむくと動くと、真黒まっくろな面つらを出した、——尖とがつた馬です。」

「や。」

「鼠です。大鼠がずぶずぶと水を匆はねて、鯰なますがギリシヤ製の尖とがり兜かぶとを頂たごいたごとく——

のそりと立つて、黄色い目で、この方をじろりと。」

「……………」

声は、カーンと響いて、真暗まつくらになった。——隧トンネル道を抜けるのである。

「思わず畜生！　と言ったが夢中で遁にげました。水車のあたりは、何にもありません、流ながれがせんせんと響くばかり静まり返ったものです。ですが——お谷さん——もう分ったでしょう。欄干もたに凭もたれて東海道を覗いた三島宿の代表者。……これが生うまれつき得え絵えを見ても毛穴が立つほど鼠きつねが嫌きらひなんだと言います。ここにおいて、居士こしが、騎士ナイトに鬢びんぼう髪かみを染めた次第です。宿しゆくのその二階家の前は、一杯の人ばかりで……欄干もたの二階の雨戸も、軒の大戸も、びつたりと閉まっていました。口々に雑談をするのを聞くと、お谷さんが、朝化粧の上に、七つ道具で今しがた、湯へ行こうと、門の小橋を跨またぎかけて、あつと言った、赤い鼠ねずみ！と、あ、と声を内へ引いて遁に込んで、けたたましい足音で、階はしごだん子こ壇だんを駆上かきあがると、あれえあれえと二階を飛廻とつて欄干へ出た。赤い鼠ねずみがそこまで追廻おしたものらしい。キャツとそこで悲鳴を立てると、女は、宙へ、飛上とつた。糸いとの仙人せんじんを倒さかさまだ、その白さつたら、と消し防ごとし夫とらしい若い奴は怪しからん事を。——そこへ、両手で空くうを掴つかんで煙かきわを掻かき分わけるように、火事じゃ、と駆かけつけた居士こしが、（やあ、お谷、軒のきをそれ火が嘗なめるわ、ええ何をしとる）

と太鼓ぬけに上つて、二階へ出て、縁に倒れたのを、——その時やつと女中も手伝つて、抱込んだと言います。これじゃ戸をしめずにはおられますまい。」

「驚きました、実に驚きましたな……三島一と言いながら、海道一の、したたかな鼠ですな。」

自動車は隧道トンネルへ続けて入つた。

「国境を越えましたよ。」

と主人が言つた。

「……時に、お話につれて申すようですけれども、それを伺つてはどうやら黙つておられないような気がしますので。……さあ、しかもちようど、昨年、その頃です。江の浦口野いりうみへ濠ただよつた、漂流物がありましてな、一頃ひところはえらい騒ぎでございましたよ。浜方で拾つた。それが——困りましたな——これもお話の中うちにありましたが、大な青竹おおきの三尺余のずんどです。

一体へきちこうした僻地へきちで、これが源氏の畠はたけでなければ、さしずめ平家の落人おちゆうどが隠れようという処あやしなんで、毎度怪い事を聞きます。この道が開けません、つい以前の事ですが。：

…お待ち下さい……この浦一円は鰯いわしの漁場で、秋十月の半ばからは袋網いづらというのを曳ひきま
す、大漁となると、大袈裟おおげさではありません、海岸三里四里の間、ずつと静浦しずうらの町まちなか中ま
で、浜一面に鰯を乾ほします。畝あぜも畑もあつたものじやありません、廂ひさしした下から土間の竈かまど
まわりまで、鰯を詰込んで、どうかすると、この石柵の上まで敷詰める。——ところが、
大漁といううちにも、その時は、また夥おびただし多く鰯があがりました。獅子浜在の、良介に
次吉じきちという親子が、気を替えて、烏賊釣いかつりに沖へ出ました。暗夜やみの晩で。——しかし一尾も
かかりません。思切つて船を漕こぎ戻したのが子の刻過ぎで、浦近く、あれ、あれです、
…あの赤島のこつちまで来ると、かえつて朦朧もうろうと薄あかりに月がさします。びしやりび
しやり、ばちやばちやと、舷ふなべりで黒いものが纏もつれて泳ぐ。」

「鼠。」

「いや、お待ち下さい、人間で。……親子は顔を見合わせたようですが、助け上げると、
ぐしよ濡れの坊主です。——仔細しさいを聞いても、何にも言わない。雫しずくの垂る細い手で、ただ、
陸おかを指して、上げてくれ、と言うのでしてな。」

「可厭いやだなあ。」

「上げるために助けたのだから、これに異議はありません。浜は、それ、その時大漁で、

鰯の上を踏んで通る。……坊主が、これを皆食うか、と云った。坊主だけに鰯を食うかと聞くもいいが、ぬかし方が頭横柄で。……血の気の多い漁師です、癩に触ったから、当り前よ、と若いのが言う、（人間の食うほどは俺も食う、）と言いますと、両手で一掴みにしてべろべろと頬張りました。頬張るあとから、取っては食い、掴んでは食うほどに、あなた、だんだん腹這いにぐにやぐにやと首を伸ばして、ずるずると鰯の山を吸込むと、五斛、十斛、瞬く間に、満ちみちた鰯が消えて、浜の小雨は貝殻をたたいて、暗い月が砂に映ったのです。（まだあるか、）と仰向けに起きた、坊主の腹は、だぶだぶとふくれて、鰯のように青く光って、げいと、口から腥い息を吹いた。随分大胆なのが、親子とも気絶しました。鮫鱈坊主と、……唯今でも、気味の悪い、幽霊の浜風にうわさをしますが、何の化ものとも分りません。——

といった場処で。——しかし、昨年——今度の漂流物は、そんな可厭らしいものではないので。……青竹の中には、何ともたとえがたない、美しい女像がありました。ところが、天女のようなとも言え、女神の船玉様の姿だとも言いますし、いや、ぴらぴらの簪して、翡翠の耳飾を飾った支那の夫人の姿だとも言って、現に見たものがそこにある筈のものを、確と取留めたことはないのをごぎいますが、手前が申すまでもありません。いわゆる、流

れものというものには、昔から、種々の神秘的な伝説がいくらかもあります。それが、目の前へ、その不思議が現われて来たものなんです。第一、竹筒ばかりではない。それがもう一重、セメン樽とえに封じてあつたと言えば、甚しいのは、小さな權だるが添かつて、箱船に乗せてあつた、などとも申します。

何しろ、美しい像うつくしだけは事実で。——俗間みだりで、濫みだりに扱あうべきでないと、もつともな分別です。すぐに近間ちかまの山寺へ——浜方一同から預ける事にしました。が、三日も経たたないのに、寺から世話人に返して来ました。預つた夜よから、いままでに覚えすない、凄すさまじい鼠ねずみの荒れ方で、何と、昼も騒さわぐ。……（困こりましたよ、これも、あなたのお話について言うようです）それが皆その像ねらを狙ねらうので、人手は足りず、お守をしかねると言うのです。猫ねこを紙かみ袋くろに入れて、ちよいとつけばニヤンと鳴かせる、山寺の和尚さんも、鼠ねずみには困こつた。あと、二度までも近在の寺に頼たんだが、そのいづれからも返して来ます。おなじく鼠ねずみが掛かるので。……ところが、最初の山寺でもそうだったと申しますが、鼠ねずみが女像めいぞうの足を狙ねらう。……朝顔を嚙かむようだ。……唯今でも皆がそう言うのでございますがな、これが変です。足を狙ねらうのが、朝顔を嚙かむようだ。爪つめさきが薄く白しろいというのか、裳もすそ、褌つま、裾すそが、瑠璃るり、青紅あかだのという心か、その辺が判はつ明きいたしません。承うつた処ところでは、居士こゝしだと、牡丹ぼたんのおひ

たしで、鼠は朝顔のさしみですか。いや、お話がおくれましたが、端初から、あなた——美しい像は、跣足だ。跣足が痛わしい、お最惜い……と、てんでに申すんですが、御神体は格段……お仏像は靴を召さないのが多いようで、誰もそれを怪まないのに、今度の像に限って、おまけに、素足とも言わない、跣足がお痛わしい——何となく漂泊流離の境遇、落ちゅうどの様子があつて、お最惜い。そこを鼠が荒すというのは、女像全体にかかる暗示の意味が、おのずから人の情に憑つたのかも知れません。ところで、浜方でも相談して、はじめ、寄り着かれた海岸近くに、どこか思召しになつた場所はなからうかと、心して捜すと、いくらもあります。これは陸で探るより、船で見える方が手取り早うございますよ。樹の根、巖の角、この巖山の切崖に、しかるべき室に見立てられる巖穴がありました。石工が入つて、鑿で滑にして、狡鼠を防ぐには、何より、石の扉をしめて祭りました。海で拾い上げたのが巳の日だつた処から、巳の日様。——しかし弁財天の御縁日だといので、やがて、皆が（巳の時様）。——巳の時様、とそう云つていたのでございます。朝に晩に、聞いて存じながら、手前はまだ拝見しません。沼津、三島へ出ますにも、ここはぐつと大廻りになります。出掛けるとなると、いつも用事で、忙しいものですから。……

——御都合で、今日、御案内かたがた、手前も拝見をしましても……」

「願う処ですな。」

そこで、主人が呼掛けようとしたらしい運転手は、ふと辰さん（運転手）の方で輪を留めた。

「どうした。」

あたかもまた一つ、颯と冷い隧道の口である。

「ええ、あの出口へ自動車が。」

「おおそうか。……ええ、むやみに動かしては危いぞ。」

「むこうで、かわしたようです。」

隧道を、爆音を立てながら、一息に乗り越すと、ハツとした、出る途端に、擦違うように先方が入った。

「危え、畜生！」

喚くと同時に、辰さんは、制動機を掛けた。が、ぱらぱらと落ちかかる巖膚の清水より、私たちは冷汗になった。乗違えた自動車は、さながら、蔽いかかったように見えて、隧道の中へ真暗に消えたのである。

主人が妙に、寂しく笑って、

「何だか、口の尖とんがった、色の黒い奴が乗っていたようですぜ。」

「隧道トンネルの中へ押立おつたった耳が映ったようだね。」

と記者が言った。

「辰さん。」

いま、出そうとする運転手を呼んで、

「巳の時さん——それ、女像の寄り神を祭ったというのは、もっと先方さきだっけね。」

「旦那、通越とわりこしました。」

「おや、はてな、獅子浜へ出る処だと思つたが。」

「いいえ、多比の奥へ引込んだ、がけの処です。」

「ああ、竜が、爪で珠をつかんでいようという肝心の処だ。……成程。」

「引返しましょうよ。」

「車はかわります。」

途中では、遙はるかに海ぞいを小さく行く、自動車ゆが鼠はしの馳はしるように見えて、岬みさきにかくれた。

山藤が紫に、椿つばきが抱いた、群ぐんじょう青あおの巖いわの聳そびえたのに、純白な石の扉かどの、まだ新しいの

が、ひたと鎖とぎされて、緋ひの椿つばきの、落ちたのではない、優やさしい花が幾組いくぐみか祠ほこらに供ともえてあつた。

その花には届くが、低いのも階子か、しかるべき壇がなくては、扉には触れられない。辰さんが、蠹立して、巖の根を踏んで、背のびをした。が、けたたましく叫んで、仰向けに反つて飛んで、手足を蛙のごとく匆ねて騒いだ。

おなじく供えた一束の葉の蔭に、大な黒鼠が耳を立て、口を尖らしていたのである。憎い畜生かな。

石を打つは、その扉を敲くに相同じい。まして疵つくるおそれあるをや。

「自動車が持つ、ありたけの音を、最高度でやっつけたまえ。」
と記者が云った。

運転手は踊躍した。もの凄まじい爆音を立てると、さすがに驚いたように草が騒いだ。たちまち道を一飛びに、鼠は海へ飛んで、赤島に向いて、碧色の波に乗った。

——馬だ——馬だ——馬だ——

遠く叫んだ、声が響いて、小さな船は舳を煽り、漁夫は手を挙げた。

その泳いだ形容は、読者の想像に任せよう。

巳の時の夫人には、後日の引見を懇請して、二人は深く礼した。

そのまま、沼津に向つて、車は白鱗青蛇の背を馳せた。

大正十五（一九二六）年十月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集」岩波書店

1942（昭和17）年7月刊行開始

入力：門田裕志

校正：林 幸雄

2001年9月17日公開

2005年9月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半島一奇抄

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>